

令和2年度 教育センター・ニュース

教育センター・ニュース

教育センター全体の活動

● 2020 年度新入生全学共通科目学修相談会

教育センターでは毎年新入生を対象に教育センター教員による「新入生全学共通科目学修相談会」を開催しており、2020 年も 4 月 10 日に実施しました。

今年の相談会は、新型コロナウイルス感染症拡大の下、感染拡大防止策を講じた上での実施となりました。「教員ならびに学生間の物理的空間の確保」のため、学部別に時間帯を区切り、事前対応に大講義室をあて、相談室も 2 部屋に分ける等々、対策に努めました。

当日はコロナ禍にもかかわらず総数 270 名の新入生が来室し、教育センター教員 14 名が相談にあたりました。相談者内訳は、男女：男 117 名、女 153 名、学部：地域学部 48 名、医学部 57 名、農学部 98 名、工学部 65 名でした（学部不明 2 名）。相談内容は、教養科目・外国語科目・健康スポーツ科目に加えて、教育課程表の見方、選択必修科目の取り方・選び方、その他、多岐にわたりました。

昨年までは相談会が抽選カード提出日に実施され、提出場所近くに相談室が設けられたこともあって多数の新入生が集まりましたが、今年は履修登録が web 登録になったため相談者の減少が予想されていたところ、実際には昨年・一昨年来年を上回る相談者数となりました。

理由としては、1) 実施日が各種新入生行事と重なり、例年通りになった、2) 感染症対策に伴う行事日程の変更・授業開始延期なども相俟って、新入生の大学生活に対する不安がこれまで以上に増幅された、など種々の要因が複合した結果と考えられます。

学部比は年によって変動がありますが、今年は農学部が 98 名で他学部の 2 倍から 1.5 倍の人数となりました。これは、農学部の全学共通科目説明会が教育センター教員によらず、農学部独自で実施されていることと関係していると考えられます。

教養科目について質問相談件数が多いのは従来からの傾向で、相談内容について大きな変化はありませんが、昨年まで多かったマークシート記入関連の相談にかわって増加が予想された web 登録関連の質問は予想を下回り少数でした。その分、実質的な相談が増加したとの印象がありますが、逆に細かい質問が増加したという声もありました。

以下、来年度以降に向けての総括です。

- 1) 相談に訪れた新入生の多くが「教育課程表」や「単位」といった基本的なことを理解できないままであることが相変わらず散見された。そうした現状に即応する形であらためて来年度に向けて入学時の案内・手引き・説明会等が再検討される必要がある。
- 2) 今回は農学部の相談者数の増加が特に目立ったことから、農学部での全学共通科目説明会が新入生に十分理解されるような形で実施されることが求められる。

3) 相談会運営については、より円滑な進行とより多くの新入生への対応のため、相談時間の目安を設定して教員一人あたりの対応人数を均等化していく等の方法を検討・導入する必要がある。

(新入生全学共通科目学修相談会担当：瀬戸邦弘・田鍋良臣・松本雅弘)

● 4名の先生が退職

令和3年3月31日をもって、教育センターの松本雅弘先生、後藤和雄先生、グラシエラ・クラビオト先生、シャーリー・リーン先生の4名の先生が退職されます。長い間、教育センターにご尽力賜りましたことを感謝申し上げます。ありがとうございます。お体に気をつけてお過ごしください。何かの折には鳥取大学にお越しください。

● 教育センター改組

令和3年4月1日より、教育センターの改組が行われます。教育センターは名称を変更して「教養教育センター」に、また、教育支援・国際交流支援機構内に新たに「高等教育開発センター」と「データサイエンス教育センター」が設置されます。教育センターの教員は各センターに配置換となりますが、高等教育開発センターとデータサイエンス教育センターに所属することになる教員は、教養教育センターの兼務教員として、これまで通り全学共通教育に携わっていくことになります。

(教育センター長：橋本隆司)

高等教育研究開発部門の活動

オンライン授業での教授法改善の一環として、2020年7月、オンライン教材作成技量向上を目的に「オンライン教材作成システム（PowerRecSS）の活用」に関する研修会を実施しました。繰り返しの視聴や当日参加できない教員のために収録し、オンラインでの視聴を促しました。続いて9月、新任教員FD研修を実施しました。教育グランドデザインや3ポリシーなど本学の教育方針の説明を行い、次にシラバスの作成や講義の基本的な進め方などの解説を行いました。同じく9月、一般教員を対象に教授法改善のためオンライン上でFD研修会を実施しました。「新入生に対するオンデマンド型授業での情報リテラシ教育の実施」と「語学教育（オンライン授業）におけるペアワークの実施」を取り上げ、2名の教員が報告を行い、質疑応答と意見交換を行いました。

さらに12月、全学教職員を対象に「教学マネジメント」の啓発を図ることを目的としてオンラインによる講演会を実施しました。講演者は、前文部科学省教学マネジメント特別部会部会長／学校法人聖心女子学院常務理事、前ICU学長、日比谷潤子氏であり、「大学における教学マネジメントの現状と課題」を演題としました。教学マネジメントに関する解説及びICUでの教育カリキュラム、教育方法、成績評価等について、組織的かつ継続的な評価・改善の事例等の講演後、意見交換、質疑応答が行われました。また本年度は、新たな取り組みとして大学の学長等役職者層の組織マネジメント力向上を目的としたSD研修会を実施しました。これは、教学マネジメントと大学役職者の役割について、ディスカッション

形式で実施されました。討論者は、前出の日比谷潤子氏であり、本学の学長、理事等の役職者が日比谷氏とディスカッションを行いながら、教学マネジメントにおける大学の役職者の役割についての認識を深めました。教学マネジメントについては、学修者本位の教育を実現するため、教育プログラム、教授方法、成績評価等教育に関連する機能の評価、改善について、今後全学的に取り組む必要があります。

(部門長：永松利文)

共通教育開発部門の活動

● 全学共通科目のカリキュラムマップにおける DP 能力のスコア配分の見直し

学長室 IR セクションによる DP 能力修得度スコアの分析の結果、学生が身につけた DP 能力にかなりの偏りが見られたことが判明しました。そこで、学長顧問主催の教学マネジメント WG からの要請を受け、全学共通科目のカリキュラムマップにおける DP 能力のスコア配分の見直し案を作成しました。これをもとに共通教育推進委員会を通じて各科目担当者にスコアの再配分を依頼しました。

(部門長：橋本隆司)

外国語部門の活動

令和2年度は、鳥取大学の外国語教育も新型コロナウイルスに振り回された一年でした。

● 新型コロナウイルスの影響による相次ぐ検定試験等の中止

本年度は新型コロナウイルスの広がりによって、様々な活動が影響を受けました。実用フランス語技能検定試験（文部科学省後援フランス語教育振興協会主催）は毎年実施されてきましたが、感染拡大により春季の試験はとりやめとなりました。また、在学中に3回の受験が義務づけられている TOEIC-IP も、今年度の実施はみおくられました。教養基礎科目の英語の補習授業も実施されませんでした。

● 授業のオンライン化

令和2年度をとおして眺めると、外国語の授業は、Google Meet、Zoom などを用いたライブの授業、オンデマンドによる授業、そして感染予防策を施した対面の授業の混在する形態となりました。これらは、受講生の側・教授する側の健康面への配慮、学生が受講している他の授業の形態（実習の有無等）、時間帯、達成目標など、さまざまな要素をその都度考慮しながら実施が試みられたものでした。

オンライン授業は、コロナ禍と呼ばれる状況において、健康面での安全をはかるということを第一の目的に実施されたものですが、その機能をあらたな視点で活用することができました。必要に応じて1画面に受講生全体を映し出し、受講生の様子を見ながら講義・演習を進めることで、対面授業のイメージをつくりだすことができます。画面共有やグループ分けも便利な機能です。また、チャット機能を用いて、全員の理解度などの反応を即座にフィードバックできるということもオンライン授業

のメリットのひとつです。

● オンデマンド方式のオンライン授業 中国語教育の取り組みより

「中国語基礎Ⅰ・Ⅱ」及び「中国語応用Ⅰ・Ⅱ」はオンデマンド方式を取り入れました。オンデマンド方式は、学生が各自の時間に合わせて、随時に、また気になるところは何度も見返すことができるというメリットがあります。授業はシラバスに沿い、毎回40分前後のナレーション入りの学習動画を作成し、manabaにアップロードしました。また毎回学習動画の終了前に、約40分前後かかる課題（音読＋練習問題）を提示し、学習時間の確保を図りました。4つのクラスにおいて、それぞれ13回、計46回作成しました。

● 鳥取での「国内短期集中英語研修“イマージョン・プログラム”」

新型コロナの影響で、海外の語学研修（マレーシア英語研修プログラムなど）がオンライン形式となる中で、国内での短期英語研修（英語イマージョン・プログラム）が、令和2年12月5日・6日、コロナ感染予防策を十分におこなった上で、鳥取大学鳥取キャンパス多目的会議室において、対面で実施されました。本学英語講師（ショーン先生）による指導のもと、参加学生とTA学生（本学の留学生）たちは、二日間の生の英語コミュニケーションの時間に浸りました。

吉岡温泉、仁風閣、渡辺美術館などに少人数グループで出かけ、資料収集し、英語で具体的なアドバイスを受けながら鳥取の町を英語で紹介するプレゼンの準備をしました。通常よりTAとの英会話の機会が多かったためか、「日本人、留学生にかかわらず他者に積極的に話しかけられるようになった。」「英語を話すことが楽しいと感じられるようになった。」など、学生の満足度は高かったようです。

（部門長：福安勝則）

健康スポーツ部門の活動

● 新型コロナウイルス対策と健康スポーツ科目

今年度は、2020年3月の緊急事態宣言に始まる全国的な新型コロナウイルス（以下：COVID-19）対策に明け暮れた一年でした。鳥取大学では2020年度の開始直前にCOVID-19の影響を鑑みて、全学的に「オンライン」授業へ舵を切りました。そのために、健スポ部門も通常の対面授業から非対面形式への転換を迫られる事になりました。約一年が経ち、いまでは「オンライン」や「オンデマンド」などの言葉やその仕様も一般的な知識となりましたが、当時はまだまだ日本社会にとり未知の領域でした。まず、そのような中で、本部門が最重要課題として取り組んだのが「授業の質の保証」です。いくら授業時間を何某かで担保をしたとしても、その「質」が保証されなければ、単に紐づく活動にはなりません。そのために、専任教員間での授業設計、教育センター長との質保証相談などを頻繁に行い、結果として、ウェブ上のプラットフォームであるマナバや遠隔会議システムのミーティングやズームなどの機器を用いた「複合型授業」の形を完成させました。本準備期間は一週間、急ピッチの作業となったが教育センター長、非常勤講師、事務方はじめ関係各位の協力の下、なんとか開講日に間に合った次第です。

授業ではマナバを各授業のプラットフォームに据えて、そこで出席や課題の提出場所を確保し、授業の中身に関しては、大まかに①オンラインライブ配信、②録画した動画によるオンデマンド授業、③課題学習の3つの授業形態を準備し、回毎に担当者がその形態を選択し授業を展開しました。当初、非対面（オンライン）授業期間は「第1クォーター迄」との申し合わせでした。そのため、本部門では6月末を一つの目標として授業の設計を行う事になりました。幸いなことに、鳥取県は全国的に見ても感染者の増加傾向が緩く、第2クォーターからは予定通り、「対面」授業を実施できるようになっています。

一方で、本学全体としてはオンライン授業の継続下にあり、自動的に対面授業に移行できたわけではなかったため、独自の感染予防対策の確立が求められ、大学側に承認される必要がありました。本部門では「健康・スポーツ部門 授業運営指針 2020」を策定し、積極的な感染防止策の準備に乗りだす事になりました。準備では手指消毒用のアルコール、マスク、体温計、外部スピーカ付きマイクなどの体育授業に特有の「飛沫」や「接触」による感染防止を見据えて、重要な備品をいち早く調達し、授業内で有効活用しました。また、教える側だけでなく、受講学生にも理解の共有、協力を求める事になり、学生用の「2020年 健康・スポーツ部門（対面）授業運営指針」を作成・提示し、これまで徹底した感染防止対策を励行しています。

2020年7月以降秋学期（第3、4クォーター）も含めて、ここまで対面授業を展開してきましたがコロナ感染者は確認されず、最低限であり必須の成果をあげる事叶いました。一方で、COVID-19の世界的流行は、止まる事を知らず、新たな局面に入っており、来年度に向け新たな方策を講じて、受講生が安心して授業を受けられる環境を作っていきたいと考えています。

尚、今年度は集中講義科目においても感染拡大防止を最大限に考慮した結果、キャンプ実習、アクア1（スクーバダイビング）、アクア2（カヌー、ウィンドサーフィン）などの科目は実施が叶いましたが、スキー実習は寒冷期の宿、レストハウス、浴場などの感染防止対策が難しく、関係各位と知恵を絞りましたが実施は困難と判断され、本年度は非開講となりました。

● トレーニングルームの活用促進にむけて

毎年多くの大学関係者に利用されているトレーニングルームですが、今年はコロナ禍の影響により、感染拡大防止のため、一年を通して「貸出不可」となってしまいました。来年度はできる限り、サークル活動や教職員個人の健康維持・促進の場として利用していただきたいと考えています。

● 研究・地域貢献活動の推進

健康スポーツ部門では、大学内のみならず地域における「健康」に目を向け、「健康とスポーツ」を中心とする地域貢献活動を積極的に展開してきており、今年度も下記のような取り組みが行われました。



Figure 1 コロナ対策授業用具



Figure 2 コロナ対策授業風景

また、本部門では大学という教育の場の知の源泉である研究活動も精力的に行っています。

- ①読売新聞夕刊（全国版）に瀬戸准教授の研究に関するインタビューが掲載される。（5月19日 担当：瀬戸）
- ②大山町と㈱カーブスジャパンと鳥取大学の共同研究（2015～2020年受託研究：サーキット式コンバインドトレーニング施設の誘致が利用者の健康関連体力の向上や医療費適正化に及ぼす効果）の研究終了に伴う報告会を大山町役場にて行った。（7月7日 担当：加藤・西村）
- ③県長寿社会課からの依頼で、県老人クラブ連合会の総会で「とっとり方式認知症予防プログラム」について講演を行った。（10月5日 担当：加藤）
- ④米子市健康対策課からの依頼で、米子市介護予防サポーター研修会において「フレイル予防」について講演を行った。（10月9日 担当：加藤）
- ⑤米子市健康対策課主催「いきいき健康ライフ教室」（1995から26年間連続実施）の今年度最終回を終えた。（10月12日 担当：加藤）
- ⑥鳥取市介護予防体操（しゃんしゃん体操）検討委員会（11月2日 担当：加藤）
- ⑦米子市健康講座「フレイル予防」（11月13日 担当：加藤）
- ⑧公益財団法人鳥取県スポーツ協会主催「鳥取県スポーツ協会公認トレーナー養成講習会」にて講師を務める。（11月23日 担当：西村）
- ⑨鳥取市健康づくり推進委員会（11月27日 担当：加藤）
- ⑩国立民族学博物館主催の共同研究会の成果として『応援の人類学』（青弓社）が刊行され、共同研究者として招聘、参加していた瀬戸准教授の論考「伝統校という歴史空間を構築する応援団一岩手県立盛岡第一高等学校の事例から」が掲載された。（12月23日 担当：瀬戸）

（部門長：瀬戸邦弘）